漱石『こころ』自分の居場所

Junko Higasa

作品本文第 53 章『世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うと益悲しかったのです。私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事も能くありました』『私はしまいに K が私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなかろうかと疑がい出しました。そうしてまた慄としたのです。私も K の歩いた路を、K と同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横過り始めたからです』

「先生」にとっての「たった一人」は妻である。その最も信愛する妻ですら、自分という人間の本質を理解していないのかと思うと悲しかった。妻に事実を語るという「明確な言葉」という手段があるのに、それに至った心情を理解させる勇気が出せないために「曖昧な言葉」しか使えないと思うと、悲しかった。「先生」は叔父に裏切られて実家から切り離され、K の死によって社会から切り離され、妻の心という最後の砦に入ることができず、その門前に佇むしかなかった。それは二人で居ながら、世の中にたった一人で住んでいる寂寞感だった。それは K にも同様にあったろう。

K にとっての「たった一人」は「先生」であったのではないか。その最も信愛する親友でさえ、自分という人間の本質を理解していないと思うと悲しかったのではないか。K は、「先生」に結婚申込に至った真実を聞く言葉という手段があるのに、友情の崩壊を確認する勇気が出せないのだと思うと、悲しかったのではないか。K は家（実家・養家）から切り離され、精神の向上を目指して経済向上の世間の風潮から切り離され、幼少の頃から常に励まし合った親友という最後の砦から閉め出され、その門前に佇むしかなかった。「先生」の口からじかに結婚の報告を受けなかったことは、親友として二人で居ながら世の中にたった一人で住んでいる寂寞感をもたらしたろう。そう考えた時、「先生」の心に K の歩いた同じ路を辿っているという予感が生じる。

人間の最も淋しい時。それは「この世の中に自分の居場所がない」と感じる時ではないだろうか。そのとき心は真空状態へ導かれる。

K は真宗寺の次男に生まれた。体格も良く健康で頭脳明晰で『普通の坊さんより遥かに坊さんらしい性格を有っていたように』見受けられたにもかかわらず、長男だけが家督・財産相続の権利を持つ世の中で、医者の家に養子に出された。しかし養家は裕福であったので、医者を目指すつもりなら学費に事欠かず、将来を約束されたことは間違いない。それでも宗教と哲学に傾倒していた K からすれば、それは偽りの生き方であった。常に「精進」を口にし、そのように生きていく彼が、自分の道を曲げて医者を目指すことは出来ず、勝手に文科に進んで、それを告白して養父の怒りを買い、実家に復籍するも勘当相当の扱いとなる。何とか自力で生きていこうと苦心するが、その憔悴ぶりを見かねた「先生」に説き落されて、「先生」の下宿に同居することになる。そこで御嬢さんに恋し、それを「先生」に打ち明けるが、御嬢さんを好いてい

た「先生」は、Kに内緒で奥さんに「自分と御嬢さんの結婚」の承諾を得てしまう。
　自分の性格に最も適した「寺」にKの居場所はなかった。政治経済の実質的な国力向上を目指す社会に、宗教や哲学の精神的向上に精進する彼の居場所はなかった。さらに決定的だったのは、「先生と御嬢さんの結婚」によって、「先生」との同居で支えられた「経済」と「愛しい人」を同時に失う打撃だった。外面的な「道の居場所」と「社会の居場所」ばかりでなく、内面的な親友の心の中にも御嬢さんの心の中にもKの居場所はなかった。思えばKの人生の中では実家・養家という「家」に居場所はなかった。唯一居場所があったとすれば高等学校時代の下宿である。しかしそれも養家の援助打ち切りで継続が難しく「先生」の説得によって離れることになる。そして「先生」の手によって確保された居場所は、「先生」の手によって離れざるを得なくなった。「家」に縁がないというのは次男の宿命を象徴しているように思われる。
　そして「先生」は、父母亡きあとの実家の管理を任せた叔父に裏切られ、故郷に自分の居場所はなくなった。経済面の不安はなかったが、K に御嬢さんへの恋を告白されたことによって、御嬢さんの心の中の自分の居場所に不安を抱き、結婚の申し込みを抜け駆けした。そのあとKが自死したことによって、心理的に「社会の居場所」を求めることができなくなった。そしてKとの間の出来事を誰にも語れないことによって、手に入れた最愛の人の心の中に「自分の居場所」を見つけられなかった。それでもKと違って先生の人生の中では、裕福な実家・親友と過ごせる下宿・家庭的な下宿・結婚後の東京の大抵宅(だいていたく)、と「家」がある。これは長男を象徴しているように思われる。しかし「心の居場所」のない家は、どんなに立派でも単なる箱でしかない。それは明治31年の家制度を象徴しているようにも見える。

　このように二人の生活には物質上の違いはあった。しかしKと「先生」に淋しさをもたらしたものは存在としての「自分の居場所」が見出せないことだった。この淋しさは人間誰にでも起こりうる心の現象である。
　そして「何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいる」という感覚が、Kには日蓮上人に執心した房州の海の波のように、「先生」には「私」と出会った鎌倉の海の波のように寄せては返したことだろう。その潮の満ち引きを繰り返す間に心は徐々に真空状態に近づいていったことだろう。遺書は実質的な内容を伴って半ば冷静にしたためられ、それを結んだときに真空の一瞬がやってきたのである。

　ここで、K の遺書の中の『もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろう』という意味の文句が『最後に墨の余りで書き添えたらしく見える』ところに注目したい。ここにはこの世に「自分の居場所はない」と感じた二人と乃木大将の苦悩が凝縮されているように思う。
　K は環境に打ちのめされながらも友情に応え、精神的向上の道を見失いがちになりながらも恋ゆえに命を支えた。「先生」はKの死に対する罪の意識に揺らぎながらも妻への愛ゆえに命を長らえた。乃木大将は西南戦争で連隊旗を奪われた際の自決を止められ、自責の念を抱えながらも天皇の求めに応じて、その愛と忠誠ゆえに生き続けた。何かのため、誰かのためにつなげてきた命。Kは「精進の死」に直面し、「先生」は乃木大将における明治の精神の死に直面し、淋しさを感じた。K は己との約束を果たせず命を絶った。乃木大将は天皇存命中には約束を守り、崩御後に意志を貫いた。「先生」は「私」へ過去を教えるという約束を果たしてから命を絶った。(2020.6.26)